

平成 28 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

フリガナ スギトウ シゲノブ
氏名 杉藤 重信

研究期間 平成 28 年度

研究課題名 信州の酒造りからみるテロワールとエクメーネに関する研究

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	杉藤 重信	人間関係学部	教授
研究分担者	谷口 功	人間関係学部	准教授
研究分担者	宮下 十有	文化情報学部	准教授
研究分担者	江崎 秀男	生活科学部	教授

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

本研究の目的は、信州の日本酒造りを通して形成された歴史的社会的ネットワークを、今日の人々の日常的な暮らし（家庭生活・社会活動・経済活動）のなかで再定義することによって、持続可能な社会システムの可能性を考えることにある。近世の酒造りと街道によって促された交易圏、杜氏の役割と酒の地域性、行政（国家）による酒の生産管理と文化的統合など、多層的な関係性のなかから「酒造り」が有する社会的意味を抽出し、それと今日の人々の暮らしとの接合点を見出す。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

具体的な対象地（者）は、千国街道の大手町の蔵元と小売店、飲食店、小谷村（杜氏）、松本市（蔵元）、木曾川流域圏の中山道の木祖村（蔵元や伝統行事従事者）である。宿場町であった調査対象地が、現在どのようなネットワーク（経済的、人的、文化的）を維持しているのか、一方で、どのようなネットワークが何によって分断されてきたのかを整理する。また、近世のコメの生産高、酒の生産量に関する資料を収集している。信州は複数の街道に多数の宿場が設けられたことにより小規模な蔵元が多く存在する。そして、これらの街道によって 4 つの文化圏（北信・中信・東信・南信）が形成され、それぞれの地域性を有して酒造りがおこなわれている。2016 年度は、東信、南信の宿場・蔵元の巡見もおこない、信州の「地域性」に関する知見を深めた。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

信州には多くの街道が通る。中山道や北国街道、甲州街道、善光寺の参詣者が通る北国西街道(善光寺街道)、海のない信州に塩を送る千国街道や飯田街道などがある。江戸時代には上方をはじめ各所で酒蔵が誕生しはじめる。信州でも当初は城下町に見られた酒蔵が、やがて宿場町、ついでその背後の村に展開していった(吉田元『江戸の酒』)。創設を一七世紀まで遡る蔵元は長野県全体で一蔵あり、うち中山道沿いに五蔵が現存し、以降創設された一二蔵とあわせて一七蔵がある。長野県全体で一蔵のうち五分の一が中山道沿いにあることは、酒の製造販売や運搬にとって街道沿いの立地が蔵元に有利だったことを示す。

木祖村にある藪原宿は、中山道木曾一宿のひとつ、大名の宿泊がもっとも多かったという。西国諸大名が泊まり、東西の使者や多様な旅人が行き交い、他地域の風習や生活様式が取りこまれていった(宮田敏著・服部良男校注『唄俗一隅』)。木曾の名産となる木櫛の生産が増えるにつれ、その職人として他国からの移住者が増えていく。延宝二年(一六七四年)に八八五人だった人口が万延元年(一八六〇年)には約二倍の一六六四人となる(木祖村教育委員会『木曾のお六櫛』)。藪原宿のような商工業に重きを置く街場に、「小都市」という名称をあてる。宿場の交流が拡大することで藪原でも酒の需要が高まり、天明八年(一七八八年)の『木曾谷酒屋酒株書上』によれば六軒の酒屋があった。彼らは、酒造業とともに米穀や木櫛、雑貨を扱い、藪原宿の経済を支えていた。二代目九郎右衛門(現在の湯川酒造)が酒屋を始めて以来、一四代まで襲名され、代々、藪原の名士として経済・政治・文化・教育などに幅広く尽力してきた(『木祖村誌 源流の村の歴史(上)』)。

酒造りは、歴史・文化・風土・制度・経済などとの相互関係を保ちつつ、現在に引き継がれている。街道沿いの文化圏に、いわば「宿場の系」とでもいえるべき相互関係のシステムを見出すことができる。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

① 地域性	② 中山道	③ 酒と街道	④ 小都市
⑤ 宿場の系	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

杉藤重信・谷口功、「街道と酒から「宿場の系」を考える」、季刊『民族学』159号、2017、56-60、千里文化財団